

メディア・リテラシー育成におけるメタ認知的知識

Metacognitive Knowledge on Media Literacy Education

—個人差へのアプローチ—

- An approach toward differences among individuals -

後藤 康志

Yasushi Gotoh

新潟大学教育・学生支援機構

Institute of Education and Student Affair, Niigata University

<あらまし> 信頼性が高い情報を得ることが求められる状況において、批判的思考態度・傾向性が低い者は信頼性を軽視して簡便性を重視する傾向が示唆されている。更に、メディアの選択においては通常、よく接しているメディアが選択されやすい可能性がある。こうした態度・傾向性やメディア接触は一種の個人差であるが、これらを批判的思考のモニタリングやコントロールを行う際のメタ認知的知識として利用する可能性を検討した。

<キーワード> 批判的思考 メタ認知的知識 メディア特性の理解 個人差

1. はじめに

メディアからの情報を批判的に捉え、情報がどのような背景で構成されたかを考慮し、解釈することはメディア・リテラシーの一部である。批判的思考は道田(2001a, 2001b)によれば、見かけに惑わされず、多面的にとらえ、本質を見抜く態度や技能を指す。パイアスにとらわれず、判断を行っている自分自身をメタ的に引いて見ながら、より正しい判断ができる能力や、そのような行動をしようとする態度である。

筆者はこれまでメディア・リテラシーの発達と構造について検討し(後藤 2006)、メディア・リテラシー育成プログラムの開発に取り組んできたが、その過程で浮かび上がってきたのは学習者の個人差の問題であった。学習指導において学習者のレディネスについて配慮することは当然行われることであるが、メディア・リテラシー育成における配慮すべき個人差はあるのだろうか。筆者が目してきたのが、メディア特性の理解である。2006年以前の研究においては主として先有知覚によりインターネットや図書、テレビといったメディアの信頼性、速報性、簡便性を測定し、発達に従ってメディア特性を明瞭に認知できるようになることが示唆された(後藤 2006)。

一方、先有知覚はもともと個々の学習者の

特徴を把握するためのものではないことから、2010年代からは階層分析法(AHP: Analytic Hierarchy Process)によって可視化することにより学習者のメディア特性の理解を把握することを試みてきた。AHPは、複数の要因が絡み合う場合で合理的な意思決定を行うために考案された構造化法のひとつである。車の購入であれば価格、燃費、デザインなど考慮すべき要因に対して、いくつかのメーカーの個別の車種を当てはめていく。同じようにメディア利用も、複数の要因(信頼性、速報性、嗜好性、簡便性、検索可能性)を考慮しつつメディア(Web, 図書, テレビ, 新聞, 雑誌, Twitter & Facebook)の選択を決定していく行為である。メディアを選択する際に考慮する要因と実際のメディア選択は個々の学習者によって多様であえると想定され、そこに学習者の個人差が顕在化すると考えられる。

実際に、AHPを用いたところ、「仕事や学習に必要な最新の情報を得る」という場面設定においても信頼性をほとんど考慮せず、簡便性のみでメディアを選択しようとする学習者が一定数であるが存在することなどが明らかになった(gotoh2013)。本稿ではメディア特性の理解の個人差に関して得られた知見をまとめ、こうした個人差に対応したメディア・リテラシー育成について検討したい。

2. メディア・リテラシーにおける個人差

個人差や個に応じた指導については、学習指導総則では指導計画の作成に当たって配慮すべき内容として「各教科・科目等の指導に当たっては、教師間の連携協力を密にするなど指導体制を確立するとともに、学校や生徒の実態に応じ、個別指導やグループ別指導、教師の協力的な指導、生徒の学習内容の習熟の程度等に応じた弾力的な学級の編成など指導方法や指導体制を工夫改善し、個に応じた指導の充実を図ること」とされている。学習者が多様な知識・技能・態度姿勢をもつことを前提とし、レディネスや学習のスタイルに対応した学習環境を準備しようとする。

一方、メディア・リテラシーではどうかであろうか。例えば、メディア・リテラシー教育用教材開発研究会（2012：12）をみると、知識・理解では目標に「プリントおよび電子テキストにおける情報、アイデア、テーマ、議論を分析解釈する。多様なメディア形式が技術、形体、言語によってどのような意味を作り出しているかを説明する」となっており、レベル4（5段階の最高レベル）では「異なるメディアがどのような意味を創り出すかについての十分な知識がある」ことを求めている。実践事例としてインターネットにおけるテキストが映像、音声、文字、タグ、メニューといったメディア言語から構成されていることを知り、双方向的なメディアであることを知るといった例が提示されている。こうした知識は後述するメタ認知的知識として機能するものと考えるが、紹介されているプログラムを見る限り、学習者を白紙（タブラ・ラサ）とみているようにも思われる。筆者も同様なメディア・リテラシー育成プログラムや講義の経験から、こうした活動は多くの学習者にとって初めての経験であり、特に知識・技能・態度のレベルを事前に把握する必要性を感じたことはない。とするものではないように思わないが、メディア・リテラシーを日常的に生活場面で実践される批判的思考の活動と考えると、メタ認知的知識の有無は大きな個人差になると考えるのである。

3. 認知プロセスからみたメディア・リテラシー育成

3.1. 認知プロセスモデル

メディア・リテラシーには受容のみならず発信やメディアの操作を強調する考え方もあるが、ここでは批判的思考としての面に焦点化し、一般的な批判的思考において用いられる認知プロセスモデル（図1）を援用してその育成について考えてみたい。

インターネットの検索である情報を見つけたとする。まず批判的思考を試用するかどうかの試用判断プロセスに入るが、この時、娯楽目的であれば批判的思考スキルを活用することはないかも知れない。一方、レポートを書く、という状況であれば、出典や著者の確認など適用プロセスに進むと考えられる。このスキルの使用判断はメタ認知レベルで行われる。勿論、情報の信頼性を判定するためにはその情報源を明確にしなくてはならないとか、情報限を明確にするためにはどのような方法がある、といった知識がなければ、スキルの適用は難しい。こうした知識がメタ認知的知識である。

メタ認知的知識には、①人に関する知識（自分自身の認知的傾向や特性に関する知識、個人間との比較の知識）、②課題についての知識（ある課題の性質、到達目標、目標達成の困難さ）、③方略についての知識（目標達成のためにどのような方略を採用するのがよいかの知識）があるといわれる（Zechmeister, E. B., Johnson, J. E. 1992）。

メディア・リテラシーに当てはめると、①人に関する知識では「自分は情報収集では手軽なインターネットばかり使い、図書館で図書資料を利用した方が適切な場合でもあまりやりたがらない」といった情報が含まれるし、②課題についての知識であれば「この課題にはインターネットだけでは心許ない」といった知識が入る。③方略についての知識では、「今、Webで見つかったこの情報がどの程度使えそうなものかを確認するにはどんな方法が一番良いか」に関する知識が利用される。

このメタ認知的知識と、知識を活用して認知レベルで行っている適用プロセスをモニタリングし、うまくいっているかどうかによってコントロールするメタ認知活動が同時並行的に行われるのが批判的思考と考えられる。

3.2. メタ認知的知識

メディア・リテラシー教育用教材開発研究会の例でも見られるとおり、メディア・リテラシー育成プログラムではこのメタ認知的知識にあたる部分をカバーするものがある。これらは、メタ認知的知識では「課題についての知識」及び「方略についての知識」に関係するように思われる。実際の分析や検討を行うことが多く、批判的思考スキル育成の効果も期待できよう。

一方、メディア・リテラシーが日常生活において実践される批判的思考と考えると、そうした課題一般の知識や方略一般の知識だけでは実践までは難しいだろう。具体的に自分はどうのような思考をしがちなのか、どのようなメディアを好みがち(あるいは偏重しがち)

なのかといった知識なしに、モニタリングが適切に行えるだろうか、という懸念である。本稿でいう個人差とは、まさにこの部分の個人差であり、「自分は得られた情報の基盤を検討しようという気持ちが他の人に比べてあるのか、ないのか」「自分は図書を利用する傾向にあるのか、それともインターネットをより用いようとするのか、それは他者と比較するとどうなのか」というメタ認知的知識の中でも人に関する知識である。人に関する知識に関する実践事例は、課題や方略に関する事例と比べあまり見受けられない。特に自分自身の認知的傾向や特性に関する知識を対象としたものはほとんど見かけない。

このことは、メディア・リテラシーが日常生活において実践される批判的思考と考えたときに問題となるのであって、「課題についての知識」及び「方略についての知識」のようなある程度個人から分離可能な知識についてはあまり顕在化しないことなのではないだろうか。

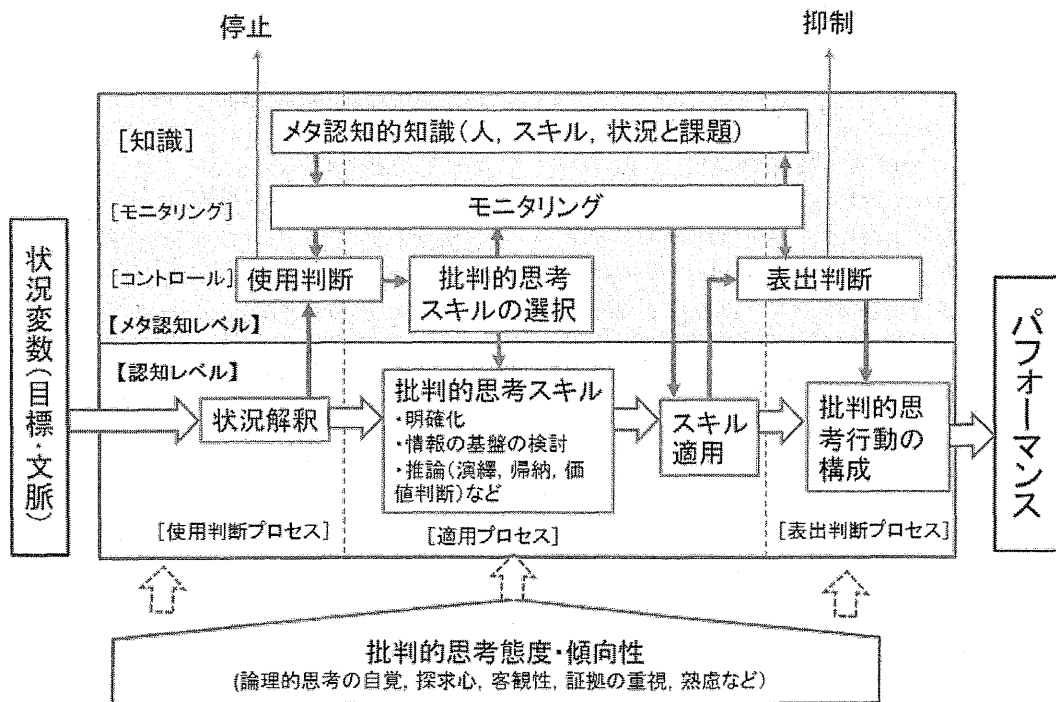


図1. 批判的思考の認知プロセスモデル (田中・楠見 2007:13)

4. メディア特性の理解の可視化の検討から見えてきたこと

メディア・リテラシー育成プログラムを認知プロセスモデルの視点で見たとき、メタ認知的知識の人に関する知識についてはあまり考慮されていないのではないかと、それらを個人差として学習者自身が知り、教師が知ること、日常生活において実践される批判的思考としてのメディア・リテラシーの育成が可能になるのではないかと、という問題を提起してきた。以下、限られたデータからではあるが、現状のメディア特性の理解の可視化の研究から活用可能なメタ認知的知識について整理してみたい。

4.1. 信頼性を重視するタイプとそうでないタイプの学習者が存在する

筆者は信頼性をほとんど考慮せず、簡便性のみでメディアを選択しようとする学習者が一定数であるが存在することを見いだした (gotoh2013)。

更に、複数の調査で一貫して信頼性を重視するほど簡便性、嗜好性、速報性といった特性については重視しない傾向が見いだされた (例えば後藤 2012a)。

こうした個人差の背景として批判的思考態度・傾向性 (論理的思考の自覚、探求心、客観性、証拠の重視、熟慮など) との関係が示唆された (後藤 2013a)。つまり簡便性のみでメディアを選択しようとするタイプの学習者はもともと批判的思考態度・傾向性が低かった可能性がある。

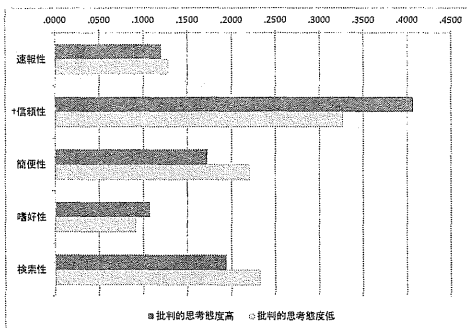


図2 メディア特性による比較 (後藤 2013a)

また、実際に「仕事や学習に必要な最新の情報を得る」ような経験の有無を検討するため、経験豊富と思われる現職教員と大学生を比較したが明瞭な結果は得られなかった (後藤 2013b)。

4.2. 接触度が高いメディアほど選択されやすい

研究当初はまったく想定していなかったことであるが、メディア特性毎にどれだけ重視するのかの総和で見えていくと、全てのメディアについて接触度が高いメディアほど総和も高くなる傾向が見られた (後藤 2013c)。

つまり「仕事や学習に役立つ最新の情報を得る」という目的においても、実際に活用する (したい) メディアは、本人が自覚しているか否かは別として「普段から親しんでいるメディア」である可能性が高い。

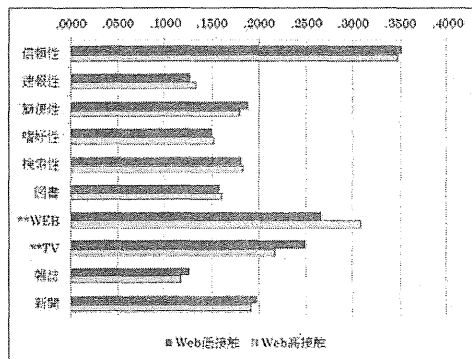


図3 接触度 (Web) による比較 (後藤 2013c)

5. まとめと今後の課題

前節で見てきた傾向は限られたデータからの知見であり、更なる検証が必要であるとの自覚の元、個人差に対応したメディア・リテラシー育成プログラムへの示唆について整理してみたい。

第一にメディア特性の理解に関する個人の情報、特に批判的思考態度・傾向性は、メタ認知的知識として利用可能かも知れない。例えば、自分は信頼性を重視するタイプか、そうでないタイプかについて自己診断形式で提供することができれば、より適切なモニタリングとコントロールが可能になるかも知れ

ない。人に関する知識は自分に関する知識と人一般に関する知識の両方が含まれるが、この両方を提供することで個人差に対応したメディア・リテラシー育成が可能になると思われる。

第二に、メディア接触に関する個人の情報は、メタ認知的知識として利用可能かも知れない。経験的にも、ある種の方法に慣れてしまうと無意識のうちその方法で問題に対処するということはよくある。メディアを利用しようとするときにも、普段のメディア利用の経験に左右される、というのであれば、利用する学習者はそうした自分の癖について理解しておいた方が良好だろうし、意識的に情報収集のレパトリーを広げることも必要になるかも知れない。

次に、課題について述べる。個人差に対応したメディア・リテラシー育成プログラムの開発・実践するためには、測定と実践の往還の必要性である。本稿では、主に質問紙調査による測定をデータとしてきた。実際のメディア・リテラシー育成プログラムに測定から得られた知見を生かし、実践することが必要である。

課題の一つ目として、メディア特性の理解の可視化によって得られた情報を学習者にどうやってフィードバックするか、ということである。より具体的には、評価するためのインデックスを個人内に求めるか、個人間に求めるかが課題である。後藤(2013a)では批判的思考態度の測定尺度として批判的思考態度尺度(平山・楠見 2004)を用いたが、そもそもこうした心理尺度は個人へのフィードバックを必ずしも前提としていないため、そのままフィードバックに利用するわけにはいかない。十分なサンプルを取ってその中での相対的な位置で示したり(個人間)、同一個人の学習前後などの個人内での変化を比較したり(個人内)することが考えられるが、その際にどのような尺度が利用可能か検討していきたい。

課題の二つ目として、個人差を踏まえてどうやって個に応じた学習環境を作るかということがある。例えばインターネットだけを情

報源として利用するタイプの学習者がいたとして、その個にどのような働きかけが可能かということである。後藤(2012b)においてメディア日記法により日々のメディア利用を可視化する手法を提案したが、こうした本人の意識の変容を求める手法だけでよいのか、学習者自身を取り巻くメディア環境(例えば図書や新聞に容易にアクセスできるなど)まで含めて改善しなければならないのかは不明な点が多い。具体的に実践を通して効果を検討していきたい。

この際、参考になるのはメディア・リテラシー育成に関する事例ばかりではなく、一般的な批判的思考育成に関する知見も有益な示唆を与えてくれることが考えられる。

5. 謝辞

本研究の一部は、科学研究費助成事業(基盤研究(C))「メタ認知とパフォーマンス評価を組み入れた高次批判的思考力育成モジュール教材の開発」課題番号 24501179: 研究代表者後藤康志)による助成により行われています。感謝申し上げます。

参考文献

- 後藤康志(2006) メディア・リテラシーの発達と構造に関する研究. 新潟大学提出博士学位論文
- 後藤康志, 丸山裕輔(2009) メディアに対する批判的思考を育成する教材パッケージの開発. 日本教育工学会論文誌, 33: 89-92
- 後藤康志 (2012a) AHPを用いたメディア特性の理解の可視化. 日本教育工学会研究報告集, JSET12-3:31-36
- 後藤康志 (2012b) メディア認知の意識化を組み入れた批判的思考力育成プログラムの開発. 科学研究費補助金基盤研究(C) 研究成果報告書.
- 後藤康志(2013a) 批判的思考態度とメディア特性の理解の関係. 日本教育工学会研究報告集, JSET13-4:89-92
- 後藤康志(2013b) メディア特性の理解の現職教員と大学生の比較. 日本教育工学会研究報告集, JSET13-1.241-246

- 後藤康志(2013c) メディア接触によるメディア認知の比較 日本教育工学会研究報告集, JSET13-2:133-139
- Gotoh, Y. (2013) Visualization of Understanding of Media Characteristics Using Analytic Hierarchy Process. Computer Technology and Application, 4(10):In Press.
- 平山るみ・楠見孝 (2004) 批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響- 証拠評価と結論生成課題を用いての検討-, 教育心理学研究, 52, 186-198
- メディア・リテラシー教育用教材開発研究会 (2012) 小学生～高校生向けネット時代のメディア・リテラシー教材報告書. http://www.mlpj.org/cy/cy-pdf/ml_material_for_students.pdf (参照日 2014.01.23)
- 道田泰司 (2001a) メディア・リテラシーから教育リテラシーへー教育における批判的思考ー. 初等教育資料, 738:68-71
- 道田泰司 (2001b) 日常的題材に対する大学生の批判的思考ー態度と能力の学年差と専攻差ー. 教育心理学研究, 49:41-49
- 道田泰司 (2001c) 日常的題材に対する大学生の批判的思考ー態度と能力の学年差と専攻差ー. 教育心理学研究, 49:41-49
- 田中優子・楠見孝(2007) 批判的思考プロセスにおけるメタ認知の役割, 心理学評論, 50, 256-269
- Zechmeister, E. B., Johnson, J. E. (1992) Critical Thinking A Functional Approach.(宮元博章、道田泰司、谷口高士、菊池聡訳)クリティカルシンキング入門篇. 北大路書房